

第 13 回くまもと未来会議 議事録

日 時：平成 26 年 9 月 12 日（金）午後 3 時～午後 5 時

場 所：KKR ホテル熊本（2 階 ローズルーム）

テーマ：熊本の未来に向けて～激動の中に生きた先人達は何を見ていたのか～

出席者：^{い お き べ} 五百旗頭 ^{かおる} 薫 委員（東京大学大学院法学政治学研究科教授）

^{よしむら} 吉村 ^{とよお} 豊雄 委員（熊本大学名誉教授）

^{かばしま} 蒲島 ^{いくお} 郁夫 議長（熊本県知事）

【事務局】

大変お待たせいたしました。定刻になりましたので、ただ今より「第 13 回くまもと未来会議」を開催いたします。

私は、会議の事務局を担当しております、熊本県企画振興部企画課の小原と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、はじめに、本日ご出席の委員の皆さまをご紹介します。

まず東京大学大学院法学政治学研究科教授 五百旗頭薫委員でございます。

続きまして、熊本大学名誉教授 吉村豊雄委員でございます。

お二人の経歴につきましては、配布資料の裏面に記載しておりますのでご覧ください。

それでは、これより議長が会議の進行を行います。蒲島知事、よろしくお願いいたします。

【蒲島議長】

皆さん、こんにちは。大変ご多忙の中、13 回目のくまもと未来会議にご出席いただき、誠にありがとうございます。また、今日はたくさんの方が傍聴に来てくださり、ありがとうございます。

私は、くまもと未来会議を平成 20 年に設置しました。これは、私が 1 期目の知事になった年であります。くまもと未来会議は、熊本県の飛躍につなげるために、有識者の方々に大所高所から様々な意見をいただく会議です。会議で出た新しい方向性やアイデアについては、これまでも県庁全体で共有して積極的に政策に生かし

てきました。

本日は、熊本の未来に向けて「激動の中に生きた先人達は何を見ていたのか」という大きなテーマの下で、お二人の先生に議論をいただきたいと思い、日本政治史が専門の五百旗頭薫先生、それから、日本近代史が専門の吉村豊雄先生をお招きしています。ぜひ幅広い視点から自由なご意見をいただきたいと思っています。

まずは、吉村先生の方からご意見をいただいでよろしいでしょうか。

【吉村委員】

私は大学で教えていまして、熊本もかなりフィールドにしているのですが、どちらかという世の中の問題の多い時期、あるいは、その時代の問題は何かということをしております。そもそも今年3月に退職をいたしまして、もう少し社会の人が読みやすい、片手で読めるような、そういう本を年間2～3冊ずつ書いていきたいと考えております。それで、もう今、2冊書き終えたところですが、できれば熊本がもう少し元気が出るような、過去、先人達がこういう形で激動の時期を乗り切ってきて、こういう現在につながっているというような、そういう歴史を書いてみたいと思っているわけです。

あまり歴史を肯定的にばかり見るのも、また批判もありそうですが、できれば熊本というのは、こういう全国に提示できるものがあるんだというところの一端を、この2時間の中でお話して、「そうなのか、もうちょっと歴史に自信持たないといけないな」と感じてもらえたらと思います。努めて私の職場でも、特に明治維新の前段階にはこういう政治経済、社会の高まりがあるんだということを検出して、どういう形で現在につながっているのかという、非常に歴史のプラス面を拾っていますので、その辺りを少し皆様方と共有できたらと思っています。よろしく願いいたします。

私が最近、これから出る論文集の中にも書いているのは、江戸時代、墨で長い紙に書いている、そういうものを皆様方もテレビドラマで見られたと思います。あのような長い紙に書く墨の時代が、今日の日本の文書行政というものと、どこで入れ替わったのだろうということです。実は、あれは明治2年の12月に中央政府から、今後は、役用、いわゆる公用の紙はこういうものを使ってほしいというものが出ました。それは、紙の両側に8行ずつ罫という、いわば便箋のようなマスが印刷してあるものがあります。あれは文字通り中央にカイ（罫）といいますか、ケイ（罫）といいますか、折れるような形に紙がなっています。これは、江戸社会にとりましては衝撃的な紙でした。なぜかと申しますと、江戸時代というのは現代の紙と同じように、だいたいA3くらいの紙を一枚の紙として使います。あれを切ったり、あるいは四分の一にしたり、いろんな形で使っているのですが、基本的には、紙をの

りで貼り接いでいきます。この前、長州に行きましたが、おそらく 200 メートルくらいの長さにまで貼り接いでいました。要するに紙を貼り接ぐというのが、いわば同時的に、同じ貼り接いだ人が同じ目的で、この文書を関連がある文書として作ったんだという、そういう長い古文書の伝統があります。

これを一枚の紙にしてしまいますと、これはすごく大変です。というのは、もうこれは紙も規格化されますし、それから、こういう、誰が作ったか分からないような紙で文書を作って、これを上にあげていきます。色々な起爆力になって変わっていくんです。ですから、墨で書いている、この長い紙の時代の中に、今の A 4 の紙を使えるのと同じような衝撃がくるんです。ところが、熊本は、実は江戸の中頃から一枚の紙で文書を作るということをやっています。そして、これが 10 枚、20 枚になった時には、これを中から折って、そしてこよりで綴じて一点の文書にしなさいという形にもっていつているんです。これは、私も全国調査をしますけれども、熊本だけです。他の所でも寸前までいつているのですが、そういう行政には達成していない。そうすると、それは藩と領民の関係、それから熊本藩全体が共通してどういう紙を使うかという、大きな、ある意味では全員の合意がないとそういう社会にはならないのです。

そうすると、そこからたくさんのものが見えるんです。領主も領民も同じような紙を使うことは大変なことです。そういう大変さというのは、実はあんまり学会では分かっていなかった。私は熊本型の、公用紙では領主も領民も実は同じ紙を使っていたという、そういう行政は、近代にどうつながるかということが実は分かってくると考えています。そうすると、近世初期、細川氏が入国した段階、あるいは清正段階、あるいは江戸時代中頃の宝暦の改革がどういうもので、どうしてそういう一つの社会とか行政の到達に至ったのか、様々な問題が解明できると考えています。

ですから、紙一枚と言われますけれども、この紙一枚で、例えば熊本藩長から地方の村役場に紙が回され、それを使って知事宛ての上申書を書きます。そうすると、知事はその現物を元に決裁していきます。そういう信じられないような行政に、実は熊本は達していたのです。そういうものを起爆力に、少し熊本から発信していきたいと考えています。色々なものが見えてまいります。少し、そういうところを話していきたいと思います。

例えば通潤橋を造るときの申請書も、同じ農村で出回っている申請書で書かれています。つまり、あれだけの巨大事業が、実は農村で取り交わされているような公用文書と同じレベルで県庁に出されて決裁されています。通潤橋は現在のお金でだいたい 20 億円かかっています。当時の 20 億円というのは巨額です。おそらく熊本藩の年間予算が 50 億円くらいですので、大変なものです。そういう巨額なものが、

実は本当に、庄屋さんが持っておられる文書で申請されて藩長が決裁をして、20億円がおりている。そういう形になるんです。非常に色々なものが分かってくるということでもあります。

【蒲島議長】

それでは、五百旗頭先生お願いします。

【五百旗頭委員】

はい、ありがとうございます。熊本にお邪魔してお話をすることになった時に、最初に気が付いたのは、熊本に対して私は少し恨みみたいな感情を持っていたということです。政治学界は蒲島先生を中心に、これから発展していくんだと希望を持っていたところ、知事になってしまわれて、我々は非常にさびしい思いがいたしました。でも、その後、大変充実感を持って仕事をされていらっしゃる様子を見て、これもありかなというふうに思い始めたというのが熊本に対する私の感情であります。

私は熊本について、吉村先生のような専門家ではありませんので、ここに来て、むしろ私の方から伺う、教わることばかりだと思います。私は日本政治史外交史ということで、日本の国全体にとっての政治外交というものの歴史を勉強しています。ですから、熊本についての知識は乏しいです。ただ一つ、私が思いますのは、どこか一つの地方から、そこを舞台回しとして近代日本の政治を解き明かそうとするならば、それは熊本から見るべきだろうと思います。今日はそういう話をしたいと思います。

なぜそう思うのかということですが、おそらく日本の近代の政治は、二つの種類のドラマを描く歴史であります。一つは自由党系列の政党があって、これは板垣退助さんがつくったものです。もう一つが改進黨系列ですが、大隈重信さんがつくった政党です。色々ありますが、基本的には全国レベルでは、この二つの政党がずっとライバルとして張り合いながら、日本の政党政治は発展してきた。自由党は政友会になって、戦後の自由民主党でいえば、大まかにいえば自由党の方になる。改進黨の方は、やがて民政党というふうになって、戦後は自由民主党の、出入りはありますけれども民主党の方になって、それは合体して自由民主党になっているということになります。

歴史を変えるドラマに、二種類あると申しましたが、一つは、自由党と改進黨が合体しそうな瞬間がいくつかあるんです。合体すると衆議院を掌握して、薩長の藩閥政府を一挙に覆えせそうになってしまう。政党内閣ができるのではないかと、という興奮する瞬間がありました。国会開設されるのは1890年ですが、そのころには

大同団結運動といって、二つの政党が力を合わせようという気運が盛り上がりました。

あるいは1898年、日清戦争の後ですけれども、隈板内閣ができるんです。大隈を首相にして、板垣を内務大臣にした本当の政党内閣ができるのです。藩閥政府は一度、自分達の本丸を明け渡さなければいかんということになりました。4カ月の短命の内閣でしたけれども、これも大きなドラマでした。

それから満州事変の1931年、民政党と政友会が力を合わせて協力内閣を作り、それで満州事変の荒波を乗り越えようという構想が出てきました。これは熊本出身の、当時、内務大臣になった安達謙蔵という人が画策した計画です。これらは一つ目の種類のドラマです。

それで、なぜこういうドラマが起きるのか。それは、二つの政党の間で両方の仲立ちをする勢力がありました。それが九州です。九州改進黨といって、「自分たちは自由民権運動です。そして藩閥に反対です。でも自由党でも改進黨でもなくて、両方に対して門戸を開けていますよ」という超党派的な進歩政党が、九州にあったんです。これは自由党の一部になるんですが、改進黨系は、ずっとこの九州改進黨、名前も同じ改進黨ですし、これを窓口にすれば、うまく自由党系に入りこんでいけるんじゃないかと狙い続けるんです。これが、今言ったドラマの原点になるのです。

なぜ九州には、そういう自由民権運動の代表団結ができるかということ、その原因は熊本にあります。熊本国権党という藩閥政府寄りの勢力があまりにも強力なので、熊本の民権派が大変な危機感を覚えます。周りの九州の他の県に呼びかけて、自由民権運動の代表団結をつくろうじゃないかと。これが九州改進黨になるのです。ですから、民権派の進歩主義の大同団結ができそうだった理由は、九州の進歩の代表団結があったからで、そんなものができた理由は、熊本に強力な熊本国権党があったからで、そう考えると熊本というのは面白いな、とっていました。なぜそんな熊本に、一円を支配するような強力な地域政党がというのは、たぶん今日、吉村先生や蒲島知事と、熊本の地域性について議論をしながら考えていけるのではないかという気がいたします。

二つ目のドラマは、政友会と民政党、つまり自由党系と改進黨系ですが、はっきり言って自由党系の方が強いんです。なぜかということ、自由党系の方は、地域ごとの派閥の寄せ集めです。それぞれの派閥が競争して自分たちの地方の利益を誘導しようとする。だから、内部はバラバラでよくけんかをしていますけれども、活力もある。それに対して改進黨系は、選挙はいつも負けるんです。なぜかということ、財政再建を大事にする、健全財政を大事にする政党なんです。それは正論だし正しいねと、皆だいたいと思うんですが、具体的な利益に結びつかないので選挙では負けるんです。でも、ずっと改進黨系が負けていると、やっぱり日本の財政がもたなくな

ります。時々、改進黨系が勝ち、二大政党のダイナミズムを実現してきたんです。

どうにかして改進黨系が時々勝つ瞬間が二つ目のドラマです。これも、とても不思議です。私はそれを研究してきた一人ですが、私の結論は、改進黨系は確かに不利だった。黨員たちも不満を持っていた。本当はもっと勝ちたいと思っていた。でも我慢していたんです。なぜ我慢をしていたかということ、改進黨の組織をずっと世話をする人がいました。その、ずっと世話をしてくれる人に、みんな頭が上がらない。その人が「健全財政が大事だというのが幹部たちの意見なんだから、自分もそれに従う。だから君たちもそれに従え。」と言いつづけたのです。その人が、二つ目のドラマの鍵を握っていたんです。

その人が、さっきも名前が出た熊本出身の安達謙蔵です。彼は熊本国権党の幹部で、最も活力がありました。朝鮮半島で王妃を暗殺してしまうという閔妃暗殺事件が日清戦争の後に起きて、日本の国際的な立場を揺るがすのですけれども、そのことの善し悪しは別として、その実行隊長といわれたのがその安達謙蔵です。ですから、彼はナショナリストとして、国権派として、いわくつきの人物です。しかし、だからこそ国全体の観点に立つと健全財政で我慢するしかないというふうに見るんです。「僕も我慢するから君たちも我慢する」と言うと、みんな、安達さんが言うならと我慢をする。若いころ無茶をして、投獄されて命の危険を感じた、しかも、選挙区の面倒を大変良く見て「選挙の神様」というあだ名を徳富蘇峰からもらっている、その安達さんが言うならということで、我慢して、なんとか改進黨系の組織は続いた。大きな財政の危機が来たりすれば、改進黨の方の地滑り的な勝利をもたらす。これが近代日本の二種類目のドラマで、これはやっぱり熊本国権党の出身者である安達が、進歩的な政党の組織の中枢に座ってしまったからです。そういう意味で、熊本から見た近代政治史というのがあるのではないかと、今日は参りました。

皆様から、いろいろお知恵をいただいて、今、言ったことを願わくば肉付けしていきたいと思っております。以上です。

【蒲島議長】

ありがとうございます。今、安達謙蔵の話が出ましたけれども、東大の法学部と熊本の間にも深い関係があると思います。特に刑法の分野では、細川藩の刑法、それから、ずっと刑法に関しては熊本出身の政治家、あるいは学者、一番有名なのは東大の総長になられた平野龍一先生。そういう意味では今、政党の源流をたどってもらいましたが、いろいろな源流の中に熊本があるということ、私どもはとても誇りに思っております。

それでは、吉村先生、先ほどの話をもう少し続けていただければと思います。

【吉村委員】

私も、刑法には非常に関心があります。と言うのは、宝暦の改革というものが江戸中期にあって、熊本藩は基本的にペリー来航後も改革らしい改革というのは、やっていないんです。いわば宝暦の改革で、もう廃藩置県までいっている状態でした。その時に、どこの藩でも藩政改革というものをやっているのですが、財政改革に向かうわけです。財政改革というのは基本的には失敗するんです。年貢の量というのは35万石で、これを36万石とか40万石取ろうと思うと、すごい社会の反発と、それから5万石増税するときには、やはりその説明責任がいるわけです。熊本藩が非常に財政改革で成功したのは、35万石でやっていける政治の仕組みを作れたことです。だから、それ以上は年貢を取らないので、あとは社会のほうでやってほしいと。

ただし、社会ができないことは政治がやるということで、一つ大きな柱として学校を作るわけです。当時の武士の子どもたちは、ほとんど一日ごろごろしていたので、これはいけないということで子どもたちを全員小学校に行かせたのが時習館です。城下町に数千人の子ども達が、することもなくたむろしているという状態がある。なぜ学校を作ったかというのは、基本的には武士の子ども達に一日の生活軸を作らせるということです。要するに武士の子ども達に、生活の午前中は勉強して午後は武芸をするという、このライフスタイルを確立するというのが一番です。

それからもう一つが、やはりこの宝暦の改革の始まりの時に刑法を作るんです。そして、明治政府は、まだ刑法が無い時に、熊本藩の刑法を暫定的に中央の刑法としていくわけです。それほど近代性を備えているんです。その刑法改革を、改革の執行部の誰がどういう観点からやろうとしたのかよく分からないのですが、とにかく熊本藩の改革は、政治がやれることはやるけれど、財政出動の面はできないということです。それは35万石のうちの8割が人件費で、それから色々な紐付きの財源が決まっていますので、例えば飢きんが起こる、赤痢が起こる、そういうものに対して、財政ができることは極めて限られています。その時に、社会の安定化のために刑法を作ります。それから城下町の問題となっていた、例えば子ども達がごろごろしている状況を解決します。

それから、おそらく歴史を通じて人々の最大の不安であった健康について、再春館という医学校を作って、いわば、医師の国家免許制度にしたわけです。要するに、もぐりの医者ではなくて、医者は必ず再春館を卒業していないとできないという形にしていって、健康面に備えたということです。そういう、財政には、ほとんど強化もせず、しかし、民間でできないことは政治がやるという形にしました。

細川重賢という人物は、政治は嫌いだと言い、堀平太左衛門という者に委任をしています。要するに政治はお前に任せ、自分は学問あるいは文学の世界でやる、た

だし、政治の雰囲気は持ってやろうと。こういう型の政治をしたところに、やはり宝暦の改革の秘訣があって、そして堀の下にブレーンが集まり、おそらく政治学を教えられるのではなくて、今、時代の変革期に何が必要かという時に、社会の安定化、暗面を作る一つの源として、人を罰するためではなく、一つの社会のガイドラインとして刑法を作るという、そういう道が選択されているという気がいたしました。そういう意味では、近代につながる、政治が果たす責任範囲というものがよく中枢部で議論された改革ではないかと思っております。

もう一つだけ付け加えますと、私の大学では永青文庫という細川家文書をお預かりしています。あれはおそらく前田とか水戸とか、あるいは池田と並ぶ日本最大級の大名家という組織体を持っていたと思うんですけれども、皆さん方がお知りにならない巨大な特色があります。というのは、あれは、大変な時系列の文書ですけれども、豊臣秀吉の時代の文書が1点もありません。なぜかと申しますと、細川藤孝が初代であります。二代目忠興という人がいました。ガラシャ夫人と結婚した人物です。忠興から忠利にバトンタッチする時に、なかなか忠興は政権を手放しませんでしたけれども、手放すときには自分の藩主時代の文書を全部持っていつているわけなんです。小倉から中津に持って行っています。ですから、熊本大学の永青文庫の中に藩主忠興時代の、豊臣時代の文書は1点もありません。ただ一つ残っていますのは、忠興が息子忠利に宛てた手紙だけが残っているという状態です。ですから、確かに忠興という人は癖はあるんだけど、政権を渡す時には自分の息のかかった家臣も、それから文書も、全てを中津に持っていつているわけです。

そういう意味では本当に全国的に珍しい、完全な政権交代がなされているということです。このことが細川家の安定、そして今、江戸中期の改革の非常に徹底した、藩主と堀平太左衛門という執行部の役割分担が、そこらあたりから出てきているのではないかと思います。ただし、幕末にペリーが来た、あるいは開港だという時に、なかなか身動きできない政治の仕組みでもありました。その辺りも近代につながる面で、少し皆様方のご指導を受けながら議論していきたいと思っております。今の五百旗頭さんが言われた、地域政党の方から、やはり私は江戸とつながるのではないかと思っております。とりあえず以上です。

【五百旗頭委員】

今のお話にあったように、大きな激動がくる時には、身動きが取りにくい面がありました。一方で、明治になってからの刑法のお話もありますし、色々なことで熊本発の変革というものがあるんです。そもそも日本の国家の仕組みをつくった法政官僚たち、その第一人者が井上毅であって、熊本出身だったんです。

さらに言えば、そもそも日本が統一国家になったのは1871年の廃藩置県です。

廃藩置県の研究で一つのポイントになっているのは、やっぱり熊本の動向だったんです。なぜ廃藩置県が平和に実現したのか説明が結構難しいんです。小さな藩、困っている藩についてはわりと説明が簡単です。自分たちの負債を中央政府に負ってほしかったということです。しかし、熊本のような大きな自信を持った藩こそ、廃藩置県の指令が出る前から廃藩置県を提案する動きがあるんです。それはやっぱり、維新に出遅れたという意識が非常に強くて、自分たちは最初の取っ掛かりで出遅れたから、この後の国づくりで、むしろ先手を打っていかなければならないという意識が非常に強かったというのがあります。それが明治になってからの熊本の新しさ、面白さの一つの源泉だったと思います。江戸時代の成功の経験というものを新たに生かしながら、近代の歴史の舞台回しがあったというふうに、今お話を伺っていて、そう思いました。

【蒲島議長】

先ほど財政再建の難しさという話が出ましたけれども、これは今でも難しい。ただ、財政が本当に危機状況になった時に、初めて、解決の方向に動くような気がします。自分自身の経験も、私が知事になった時には1兆7百億円くらいの借金があって、貯金は53億円と、ほとんど底をついていた状態で、その上にまた、リーマンショックという大きな経済的なショックが起きて、どうするんだろうと私も思いました。財政再建はやろうと思えばできるんです。ただ、明るく財政再建をやるのが難しい。財政再建というのは給料もカットされるし、いろんな政策も打てませんので暗くなる。自分の給料を100万円カットしましたが、妻以外は誰の懐も痛まないで、議会のほうも安心してカットしてくださったんです。

あれは、三つの面で良かったような気がします。一つはアナウンスメント効果。アナウンスメント効果というのは、熊本県は財政難ですよというのが一挙に分かった。そして補助金をだいたい40%カットしました。今考えると既得権益の補助金をカットするというのは大変なことです。でも自身の100万円カットがあったから、そこがすんなりと受け入れられたのかなと思います。

二つ目に良かったのは、政治的信頼というのが、たぶん、それで得られたのかなと思います。

三つ目に、もちろん財政再建の道筋ができたということがあります。アメリカの政治学というのは、だいたい政治家も、それから有権者も両方得するような、そういう政策を打つのが、ダウنزの理論という有名な理論がありますけれども、ただ、財政再建とか危機に瀕した時には自分が利益を得るような、そういう政策というのはあまり有効ではなくて、自己犠牲の政治学みたいなものが必要です。今まで東大では、ほとんど西洋流のデモクラシーを教えてきましたけれども、実際にやってみ

ると自己犠牲の政治学というのは非常に有効だなというのが感じたところです。

それで、ちょっと現代に戻ってしまいましたけれども、先ほどの刑法の話も、ここは井上毅、清浦奎吾、後で総理大臣になりますけれども、彼も司法官僚です。たぶん、清浦奎吾あたりが刑法の最終案を作ったのではないかなと思っています。その伝統を継いでいるものですから、京大の方では佐伯千仞さん、東大の方では平野龍一さん、松尾浩也さん、それから西田先生と、歴代、刑法の方は熊本出身の法学部教授がいたんです。そういう意味では、伝統というのは面白いなということであります。

それで、先ほどの五百旗頭さんの方の財政再建をやるのはなかなか難しいという話を実際にやってみた感想が、今言ったような危機に、ものすごい危機に瀕する時、それから自己犠牲、そういう色々な条件が揃わないとちょっと難しいのかなと思います。だからそういう意味では政党は、なかなかそこに手を付けられないけれど、それはそこまで危機状況ではなかったのではないかなと思います。

【五百旗頭委員】

今、さっき私は維新に出遅れたということで熊本の動きを説明しましたけれど、おっしゃるように、危機という局面がもう一つあるんです。それは、やっぱり熊本の政治を大きく規定してきた西南戦争による破壊、荒廃、そこからどうやって立ち直っていくかという危機感が非常に強かった。ですから、熊本国権党側が熊本で大きな力を持ったのも、やっぱりその危機感をみんなで共有したからです。その時に、彼らがやった重要な政策は三角港の築港です。それまでは川を使って取引をしていたんですけれども、だんだん蒸気船も出てくるし、本格的な港が必要だということで三角港を思い切って築港するんです。三つくらいメリットがありまして、第一はアナウンス効果です。これは、熊本が本気になって、新しい時代に必要なインフラをつくるつもりだということを知らしめたんです。

二つ目のメリットが政治的信頼で、熊本が早く手を挙げたんで、三角港は非常に珍しい港になったんです。当時、中央政府も貧乏だったので、港の修築になかなか国庫補助を出さなかった。最初に出した三つの港があって、一つは仙台の近くの野蒜港という、これは横浜とか神戸に並ぶような国際貿易港に仕立てようとして、特別に大久保利通たちが力を入れたりなんかして、これはもう国策です。実際は嵐で大きな波が来てうまくいかなかった、破壊されてしまった。二つ目が福井県の三国港といって、これは日本海屈指の名港で、しょうがないなと。三つ目が三角港です。この三つがいち早く国庫補助を得たと思うんです。やはり、熊本の動きが非常にあったということです。そういう国庫補助が得られるような、しっかりした体制で新しい地域づくりをしていくんだという信頼を得たということが、大事だと思うんで

す。

三つ目のメリットは、大陸への道筋ということです。三角港を修築しても、やはり神戸や大阪との貿易では一番になれない。ある程度、鉄道の方ができれば、大分とか門司の方が早い。だから、三角をしっかりと港にして、熊本と鉄道でつないでやった後、どこと交易するかといったら、思い切って大陸に出るということです。まさに熊本国権党の面々が、もちろん大陸で一旗揚げたいという野望はありますけども、かなり身銭を切って商社をつくって取引をしたり、語学教育をする学校を作ったり、そういうものが未知の民間交流の先駆けになったのは確かだと思います。

【蒲島議長】

激動の中に生きた先人たちが何を見たかというので、どうしても触れておきたいのは横井小楠。横井小楠については、吉村先生はどういった分析ですか。

【吉村委員】

私は、維新に乗り遅れたというのが、非常に当たっている面と誤解されている面があると思います。一つは、熊本藩は肥後藩国事史料という膨大な国事関係、要するに藩内の情報、あるいは政治的な動向を分析した書物があるんです。これは明治維新史研究の極めて巨大な史料文です。熊本の状況を見ますと、最近非常に注目され、それから今、昭和天皇の実録が出ましたけれども、あれに大きく寄与され、読まれているんです。というのが、藩はあの時期、多角的な情報分析をしております、ただ単に時流に乗り遅れたのではなくて、時流は極めて的確な分析をしていて、シミュレーションをしているんです。ただ、やっぱり動かなかったという面がありますが、熊本藩政当局は、極めて藩の総力を挙げて時流の分析というものはしているし、どういう対処の仕方をしていいかという動きはしているということ、これは誤解なく受け取ってほしいと思うんです。

横井小楠が、なぜあれだけ、熊本市と姉妹都市である福井で極めて人気があるながらも、熊本でなかなか人気もう一つ出ないのかといった時に、一つの大きな三派抗争といいますか、実学党と学校党という見方があるんですけれども、あれは極めて虚構のものでありまして、実学党、学校党というものの争いが、極めて近代の政党がらみの争いレベルに発展するのは、明治元年ごろからなんです。つまり、旧藩時代の慶応ごろまでというのは学校党というものはなくて、学校というのは熊本藩、社会そのものが学校党、全員が学校党委員なので、そういう意味では横井小楠を非常に不幸にしているのは、1830年頃からそういう学校党対実学党という色眼鏡で歴史が分析されて、そして学校党というしがらみの中で、横井が出る杭を打たれたという状況の見方があるって、熊本は人材を生かせなかった。

しかしながら、私は、横井は十分、藩当局には処遇をされていたと思います。例えば江戸遊学にしましても、福井への招聘にしましても、藩は、むしろ積極的に横井を江戸にやっけて、いわばトップの外交官として江戸を見分させて、そして、彼の知見を藩政に生かそうとしています。それが十分生かされたかどうかは別にして、横井が藩当局に煙たがられ、左遷されて福井へ追いやられたという歴史的な見方は少し修正していかないと、いつまでも横井は、その宿命的な構図の中で低い評価に貶められていると思っております。

ですから、私は横井を見まして、儒教的な学問をベースにしながらも、あれだけの時局分析ができるという非常に優れた人材というのは、もう少し正当に熊本藩の大きな流れの中において位置づけていいのではないかと思います。あれだけの公共という、非常にフラットな、抜け駆けている見方というものは、我々も横井を見る、平明な目を見る、鑑定を持つ必要があるのではないかと思います。特に歴史の研究者が、私は何度も新聞に載せ、連載小説にも書き、学校党対実学党という縮図は無いんだということは再三警告しながらも、漆黒から抜け出ていないというのが現状ではないかと思っています。そうなれば、横井にとっても非常に不幸だと思っています。ただ、明治に入ってから、やはり維新の出遅れという議論があって、学校党と実学党という言い方が出てきて、あれは近代政党につながっていくという一つではあります。

それから、もう一つ、私は熊本の場合は、一つの大きな縮図としては戦国期にあるかと思っています。例えば、戦国大名というのが毛利であるとか、九州で島津とか大友というのがおりますけども、熊本は、いわゆる典型的な自前の戦国大名というのはいないんです。菊池であるとか阿蘇、菊池なんかも戦国大名の資格があるんですけども、全国の研究状況で相良氏は戦国大名と呼んでも、菊池は呼んでないんです。そして、肥後の国人といわれる地域領主たちは大友であるとか島津であるとか、外来の戦国大名との間で緩やかな主従関係を結んでいるんです。この図は、やはり戦国研究として非常に重要でございますし、地域のカラーとしても重要です。

私の最近の見方は、私が十何年前に本を出した時には、やはり戦国大名が生まれないということは、代表者を出せない地域システムになっているという見方をしてきましたけれども、最近の見方は、例えば天下統一というときに200くらいの藩が残ります。その藩は、統一の不徹底から残るのかというところではないんです。むしろ逆で、日本の天下統一というのは地域国家の一つの大きなテリトリーのできる中で、上方権力ができ上がっているという面があり、肥後の場合は50数人といわれる国人の地域テリトリーこそが非常に重要な戦国の規定になっていて、その上に戦国大名がどうやって立つかという副次的な問題があるように思います。

そして、江戸時代、54 という手永がありますが、これは郡と村の中間の区域ですけども、その 54 というのは、くしくも秀吉が、佐々成正が肥後に臨む時に、「肥後には 54 の国人がいる。だから、検地をするときにも気をつけてやらなくてはならんぞ」と言った、あの 54 と全く同じです。これは数合わせかもしれませんが、そういう肥後の戦国時代にでき上がった地域的なまとまりというのが、実は近世の手永になり、江戸では、近代では郷といわれているものになっておりまして、そして、その枠組みというのが、五百旗頭先生が言われた地域の問題に、非常に通底しているのではないかなと思っております。これは政党、党派抗争の問題もありますけども、そういう大きなしがらみ、選挙構図がありながらも、大きな地域がベースになって、一つの県レベルという大きなレベルで、何か一つ大きな政治カラーを打ち出せる、そういう風土があるのではないかという理解を持っています。

ですから、戦国時代を見ますと、おそらく熊本藩というものと相良も違う、天草も違う、今は熊本県となっているけども、一つの大きな三つの国というぐらゐの理解が、あの時代にあったのではないかと思っております。だから江戸幕府も、相良と熊本藩を一緒にして熊本藩という考えはなかったと思います。やっぱり、熊本が積み上げた、そして人吉とは棲み分けてきた、この戦国のテリトリーというものを尊重して熊本藩というものができていると、そういうふうに感じています。ですから、今は熊本県となっているけども、その枠組みは大事なんですけども、同時に、やはり、この地域のまとまりというものでは、三つの大きな差異を持った地域のカラーがある。それはやっぱり正確に源を走っているのではないかというふうに思います。

【五百旗頭委員】

54 であり、それをまとめると三つであると。一つではないんですね。今の話を伺っていて私が思ったのは、熊本県で政治家をやっていくのは大変だなということですよ。例えば、衆議院議員の選挙で、小選挙区じゃない郡部で 7 議席くらいあると、そこでどうやって勝つかということです。普通の政党ならいいんです。2 大政党か 3 大政党くらいで争っていれば、いろいろ仲間が立候補をしているうちに、2 議席取れましたとか、3 議席取れました、でいいのですが、熊本国権党は優越した政党なので、7 議席あれば 5 議席か 6 議席取らないと敗北になってしまうんです。だから、今おっしゃったように非常に多様性のある、あるいは場合によっては割拠性の強い地域で熊本国権党が長い間権力を握るとするのは、ものすごい選挙上の工夫が必要だったと思います。そういうことで鍛えられて選挙の神様になった人が二人いて、一つは江藤哲蔵という政友会系の人ですが、これが松野頼三の師匠になるんです。

もう一人、選挙の神様になったのが、さっきから名前を出している安達謙蔵です。彼の選挙指導はすさまじいものがあります。例えば、7議席あるとしたら熊本国権党の候補者が6人くらい、2,000、2,000、2,000、2,000、2,000取ったとして、政友会系候補が1,800くらい取って、もう一人の政友会系候補が1,000くらいで、結局、政友会は1議席しか取れない、熊本国権党は6議席取る、というようなことを繰り返していたんです。当時、他の県で、そこまで精緻な選挙戦というのは、必ずしも行われていない。だから、安達が熊本方式を全国に波及させれば、それはやっぱり選挙を変えるんです。

1924年に日本の選挙制度に大きな変化が起きました。初めて日本で男子普通選挙制度が導入されて、非常に重要な民主化の契機でした。この時、安達たち改進黨系の憲政会が与党第一党でありまして、男子普選のもとで、どういう選挙区制を導入するかということを決める際に、最も発言力があつたのは安達でした。彼は非常に変な選挙区制を提案するんです。小選挙区でなく、比例に近い大選挙区でもなく、中選挙区を選びました中選挙区くらいの世界でこそ、安達の投票配分、技術面で一番光るんです。なかなかはっきりした証拠がなくて、なぜこんな中選挙区制になったのかは、今でも定説はないんですけれども、私の考えでは安達の熊本での成功体験、それを基にして選挙の神様として弱い改進黨系を支えてきた成功体験が、中選挙区制を選ばせている。それが一つの起源になって、戦後の自民党政権のもとに中選挙区制が、ずっと最近まで採用されてきたと思います。

ただ、戦前の中選挙区制と戦後の中選挙区制は違う面があります。戦後の自民党というのは昔の政友会と同じ、似たような派閥連合でして、各派閥が自民党の中から出てきて争う。争うためには小選挙区ではなく中選挙区。頑張れば、いくつかの派閥から当選者が出てくるというふうにしなくてははいけません。ですから、派閥同士の競争の場、遠心力が働く場だったんです。ところが、戦前の安達がつくった中選挙区制というのは、いろんな地域からいろんな候補者が勝手に出ていると票が割れて負けてしまうんです。だから政党の幹部たちが締め付けて、調整します。まさに政党の力を試されるのが中選挙区です。求心力が必要なのが戦前の中選挙区ということだと思ふんです。

ですから、熊本が多様で割拠的な地域で、政治家としてやっていくのは大変だろうと言いましたけれども、そういう多様性に鍛えられた中で出てくるリーダーシップというのは、あるんだと思います。安達とか熊本国権党の人たちは、華やかな政策はあまり言わないです。言わないんですが、今言ったような多様性に直面して、しかし、それを否定するわけではなくて、それによって自らを鍛え上げるようなリーダーシップがあると思います。それが戦前の中選挙区制をつくったわけですし、今後、日本の選挙制度がうまくいくためには、そういう考え方がどこかで必要にな

るんじゃないかというふうに思いまして、今、吉村先生がおっしゃった割拠的な、54人の国人がいる熊本の社会というのは、そういう起源ではないというふうに思いまして、大変興味深く伺いました。

【蒲島議長】

選挙の話になると、私はもともとずっと選挙の専門家なので、それも現代の日本の政治家なので、生臭くなるので、ちょっと過去に戻って吉村先生、今の話を続けましょうか。

【吉村委員】

そうですね、私は戦国期からだいたい幕末維新期、最近特に幕末維新期をやっているんですけども、最近、全国的に熊本の手永というものが見直されてきています。これは決して熊本独自ではなくて、そういう地域割拠と言われますけれども、ある意味で全国の、あるいは近代先進地域でも、割拠性というような地域的なまとまり、ある種、排他性を持たない地域のまとまりというのは無いんです。むしろ域内の、3石4石まとまるような数千家村の運動でも、日常的な運動規約というのは、色々な渡り歩くような人たち、アウトロー、そういうものを村から排除しようという、そういう規約を数千家村が結ぶような日常性があって、やはり割拠性は、外に向けたある種の差異を主張するということがベースにはありますので、あまり、その割拠性というのは強調はしたくはないんですけども、例えば今、玉名あたりに行きますと、今でも郷という言い方をしています、手永というものが生きています。あるいは小国あたりへ行きますと、小国郷と今でも言われるんです。それほど根付いているのかということで、やはりそういう地域のまとまりというものを、いい意味で継承していただくことで、防災とか危機管理にも役に立つのではないかと思います。

私は歴史をやっていまして、歴史的に根付いた枠組みというのは先人の知恵の結晶体です。どうやら維新期には、それを機械的に着手してきて近代地方行政というのがありますが、その揺り戻しで、やはり元に戻っていく傾向が出てきますので、熊本の手永というのが、もちろん功罪相半ばするところがありますけども、近代の、例えば福祉であるとか、色々な社会救済であるとかとは違うものだと考えています。私は、おそらく手永社会の中で、隣家に子どもたちが取り残される、あるいは奥さんが子どもを育てている家が子どもだけ残された時に、その子どもたちは餓死をすることは無いと思うんです。おそらく隣保組織、村の組織、地域の組織、あるいは持てる人が持てる役割を果たすような、そういう牧歌的な、そういう役割が地域社会の大きな核になっていると思います。そういう意味では今日低成長時代になった

ときに、平成版公益学というのが出てきて、何か行政もこういう江戸にバックしているような側面もありますので、いい意味でスライドさせてもいいのではないかと、そういう意識を持っています。

【五百旗頭委員】

私は、歴史研究をしつつ、平成の大合併後の集落についてのフィールドワークも少ししております。フィールドは福井県なんですけど、今おっしゃったことは福井でも言えると思います。私を取り上げている集落は200人くらいの人口のあまり大きくはない集落ですけども、昔、旧村の中心だった集落で非常に自尊心が強いんです。戦後になって、そこを中心にして、みんなで計画を立てて積み立てるという運動、いろんなところでそういった運動はしていたんですが、その集落で軌道に乗らして、周りもそれをまねし始めて、明治以前の旧村を範囲に新しい政治体ができたとです。

普通は、集落ごとの要求をそのまま町役場に持っていく。町役場がそういう要求を2割、3割聞いていると町の財政は破綻しちゃうんです。でもまず、その地区は各集落の要求を公民館に持ってきて、「お前のところの区の言っていることは、われわれ全体の利益から見れば、あんまり関係ないんじゃないか。自分たちで解決すべきじゃないか」というような議論をお互いにやりだすんです。その公民館での議論で生き残った要求だけが町に上がる。そして10項目くらい上がると、町はそのうちの1～2個を実現する。そうすると、本当はその地区で100くらいあった要求のうちの2個くらい実現すれば、みんながオリンピックに参加したような、「自分たちの要求が通った」とか、「今回は駄目だったけど、次はこういうふうにプレゼンして」というような形で受け入れていく。絶対的に財政が制約されている中で民主的な要素と財政的な合理性を均衡させてきたと言えます。彼らのもともとの歴史的な自意識というのが、そこで非常に重要だったという気がいたします。

一方で、さらに財政が苦しくなるのは確かです。周りの集落では人口がさらに減って集落機能が維持できない。そうすると、その中心的な集落が、今までは政治的な中心だったんですが、今度は軍事的な中心になる。義勇軍の中心といいますか、つまり、他の集落に出て行って、その人口の減っている集落の子どもたちが楽しく遊ぶように自分たちで公園を作ったり、あるいは空き家になっているところの窓を開けに行って風を通したりとか、そういうことをやりだす。これはたぶん、もともとの職務意識からするとやり過ぎなんです。自分たちのもともとの集落を超えて、そこまでやらなきゃいけないのかということ、彼ら、彼女たちも疑問を感じるかもしれない。そうだとすると、頑張っているところから疲れてくるという危険性はあるかもしれません。私の、ごく限られた研究ですけど。熊本でどうなっているのかな

というのは興味があるところです。歴史と現在の交わるポイントかなという気がしてきます。

【蒲島議長】

前に、吉村先生と話した時に、細川藩の時に、ものすごく自治が進んでいたという話がありました。みんな、セントラルガバメントをやるんじゃないくて、地域がいろんなアイデアを出してきてそれをやらせると。私はそんなフローというのが今からは必要な気がするんです。一つは本当に何を欲しがっているかというのが、それがよく分かる。自分たちで変えられるので自分たちの自治があるし、自分たちでお金を出す場合もあります。今は、あまりにも全ての財政が中央にあって、それを、お金を引っ張ってくる。

そういう意味では一つ、先ほどの郷の話が出ましたけれども、今、熊本県では「里モンプロジェクト」といって、それぞれが考えた案を県が財政で出し合わせるというような、まさに前、吉村先生がおっしゃった、あの細川藩のやり方を少しでも取り入れたいなと思っています。ちょっとそれを、もう少しここで、みんなで議論したいと思うんですけども、いかがですか。

【吉村委員】

今、われわれはKKRにいるんですけども、ここら辺一帯、家庭裁判所から、この道路の反対側、熊本城の反対側の方、これは官庁街です。おそらく家庭裁判所は、江戸期は詮索所といっって、いわば下級の審理機関、裁判所です。ここら辺が、人馬会所といいまして、国中からやってくる人馬を取り替えたり、あるいは集合したりする場所です。54の惣庄屋というのはここに集まっていたのです。そして、ここは千葉城といっっておりまして、千葉城会談といっって各地域の要求をたくさん持ち寄って、今、100のうち一つ、二つとありましたけども、ここで全体会議を開いている。そして、年間の54手永共同歩調で、この方向だけは共通の約束にしましょうと、そういう形で、ここで約束をしているわけです。

そして、先ほど私は冒頭で用紙のお話をしましたけれども、熊本藩長から用紙を各地方に発行するわけです。そして、色々な申請事項を上げてくる。申請事項も財源が必要ないものは地域でやれるわけです。ところが、財源を必要とするもの、要するに藩から金を借りて、藩も、今も一般会計と特別会計というのがありますように、二つ合わせて、ある意味では国家財政なんです。江戸期の財政も、35万石という人件費中心で一般会計がありますけども、それだけでは藩は持たないわけです。例えば幕末の維新时期に軍艦を買う、大砲を買う、ああいうお金はどこから出てくるのか。あるいは通潤橋を造るときの20億円、どこから出たのかということになる

わけです。そうすると、どこの藩でも金を運用して、そして、いわば本会計と違う別途会計、特別会計を持っているんです。その、いわば一つの大きな貸し手が農村社会です。特に水利土木事業というのが最大の投資先です。

そして、次に土木事業をやって畑を田にして、その、できる水田で一つのローンを組ませて10年とか15年とかの年貢返済をさせるというのが、熊本型の藩と地域の自治との関係です。なぜ熊本がこれだけ非常に高度な行政関係ができてきたかという、そういう役割分担で藩は金を貸します、そして計画を立ててください、計画を立てるときの最終立案の紙もこちらから渡しましょうと。これが用紙革命です。そして、とにかくその地域で話し合っ、場合によっては郡代にも来てもらって、案を出して、そして、これで通るといふ案が藩のほうに出されて、そしてOKが出たら、ここで最終的には県知事が決裁を書いて帳簿にとじられる。その中に膨大な、おそらく数千という事業例が集積されていると思います。

ですから、おそらく今でいえば、県の民生関係の行政というのは、熊本藩長がやるのではなくて、地域が必要とするものを自ら立案して、財源が必要ないもの、自前でやれることは自前でやっておもうと。そして、まとまったお金が必要なものについては通潤橋のように上申書を上げて、そして藩から決裁をもらって10億円とか、そういうお金をもらって、そして、これを土木事業でできた水田で10年とか15年、ローンを組んで返済をしていく。そうすると、農村社会では霊台橋とか通潤橋といったインフラが整備をされ、そして、今まで水の来なかったようなところが水田になって基盤整備ができてくる。そして、結果的には地域社会が豊かになっていく仕組みが19世紀には出来上がってきます。

ですから、藩が色々な民生上の策定をして大きな事業をするというのではなくて、この地域が必要とするものをやりましょう、その代わり、熊本では社会の平和であるとか、治安であるとか、規律であるとか、あるいは健康面であるとか、そういうことについては中央政府が責任を持ちましょう。そういう大きな役割分担があります。

もう一つだけ付け加えますと、先ほど知事のお話で、自己犠牲といいますか、いわば給料をカットするということが一つの政治的な信頼関係を結ぶということですが、やはり江戸の武家社会も同じでありまして、熊本藩の場合、細川が入ってきた時には100石について40石の定額の収入保障がありました。これは概高なすだかと申しまして、40石を基に石高を逆算していく机上の数字、これは全国、みんなそうです。だから、石高を元に議論すると非常に困った議論になります。江戸時代の石高というのは机上の数字です。計算上できた数字規制が非常に高い。だから幕末も、江戸初期の太閤検地も同じという数字になるんですけれども、それは別にしまして、40%の収入が江戸中期に最低13%までになります。なぜ、幕藩体制という武家に

よる政治が、これだけ長く安定できたかという一つの源としては、熊本の場合、35万石の藩財政の枠組みというのは基本的に変えなかった。これを40万石とか45万石にすれば、社会に対して巨大な責任が出てきます。なぜ5万石増やすのか、増やした5万石で何をするのかという、より複雑な議論になってきます。大きなきっかけは、1792年に雲仙の津波がやってきました。有明海岸に20メートルくらいの津波がやってきて、巨大な荒廃が出ました。その時に熊本藩は定額の紙幣を大量に刷ります。そして、「この金を貸し付けます」という形にしました。そして、紙のお金は不換価する恐れがありますので、必ずこれは交換します。そういう形で、金をとにかく中央銀行で持って、貸し付けると。

ここで理解していただきたいのは、銭という単位が民間のお金になります。ところが、熊本の場合、銭を銀表示にしています。これはなぜかと申しますと、これは複雑な議論で日本の場合は東日本が金本位、西日本が銀本位という金銀複本位が江戸社会でした。そのときに、やはり銀というものについての親和性があるわけです。ですから、熊本は銭という民間通貨を銀で表示するのです。その源となったのが雲仙の津波が出てきた時に銀札を出すのです。これが大きな源になって、銀を銭の単位で出したということです。これは少し難しい議論かもしれませんが、要するに銭の単位で出しながら、銀表示になっているということです。そして、そういう西日本の銀本位制と親和性を保ちながら、これを貸し付ける。そして、人々がちょっと困ったのではということで、やるときには償金に変えましょうということで、紙を不換価させなかったというところが、19世紀に通潤橋の15億円も全部、紙の金でできている。これは理解していただきたいところです。

だから、一つの雲仙津波という巨大な景況がありましたけれども、やはり、この大きな地域があれば行政ニーズが出るときに35万石の財政ではやれないんです。これは全国どこでもそうです。そうする時に、全国で困っていくわけです。やはり、財源を増やそうとして失敗をするというのが、この世界では常套パターンなんですけども、増やさない。年貢は増えない。その時に、どうやるかという、だんだん金を貸すようになる。雲仙津波が来て、「金を刷らせてください。必ずこれは交換します」という形で、19世紀の、とにかく銀札を貸す、それは銭で使う、こういう仕組みを作ったのが熊本型の地域行政の大きな成功例だと思うんです。中央政府と地方の自治社会の役割分担が出てきたという感じがいたします。

【五百旗頭委員】

その中央の部分では、通貨に対する信用リスクというのは非常に死活的な、重要な機能です。それを非常にうまく、危機の中で親和性を保たれたという話、大変勉強になりました。

地域の方は、これもまた、おそらく戦後から現代までうまくいっている地域は、たぶん似たようなことをやっていた、その一つの典型例というか、非常に先鋭的なケースが熊本なのかな、と思いました。これから同じようなことをやっていこうとすると、ますます財源は限られ、ますます繊細な使い方をしないといけないんです。集落単位でそれをうまくやっていくためには、女性の役割というのが本当に重要になってくると思います。私が見た例では、集落の集会場を建て直すという話になったんです。もともと集落の総会だと各家の戸長、だいたい男性が出てきます。高邁な議論をするんです。古代のギリシャのポリスも男性市民も同じです。外交や戦争の話をやってきたわけで、高邁な議論をする。戸長がどうしても威張ってしまって、やっぱり高邁な議論はするけれども、設計図面に落とし込めないんです。予算プランに落とし込めない。

結局、私が見ていた集落では、夫婦単位で、夫婦の平均年齢ごとにグルーピングしたんです、強制的に。そうすると同じような世代で利害や考え方が似ている女性たちがグループに一定数、強制的に集められるんです。だんだん意見を言い始めるんです。にわかに議論が具体的になり合理的になって、どれくらいの機能を持った、どれくらいの広さのキッチンをつけるかとか、宿直のための宿泊機能をどういうふうに持たせるかとか、ストーブはどこに置くかとか、そういうことをちゃんと決めて、そうやることで初めて高邁な理念が具体化されるわけです。

ただ、家庭内の家事負担が、やっぱり女性に不利になるので、もっと上のレベルまでには声が届かない。届いてしまうと、子育てしなくてはいけない夕方の時間帯に、車を飛ばして町の中心まで行って婦人会に出ないといけない、それは嫌だということ、隠然たる影響は持つんだけど、あくまでも隠然たるもので、いろんな限界がやっぱり出てくる。熊本の家事負担の状況というものは私、全然分からないんですけれども、常に知事というのはいろんな意味で人々に注目されるお立場でしょうから、「妻が反対するので、今回、給料減額はできません」というふうに言う知事というのが、もしかしたら新しいモデルになるのかもしれないと思う次第です。

【蒲島議長】

今日は、たくさんの傍聴してくださる方がいらっしゃいますし、質問もあると思いますので質問の時間を設けたいと思います。そこで、ご両人に今日の議論を振り返って、元のテーマである熊本の未来に向けて、われわれは歴史から何を学ぶのかという観点から一人8分ずつまとめていただきたいと思います。よろしいでしょうか。8分から10分でお願いします。では、吉村先生からお願いします。

【吉村委員】

そうですね、私は今、五百旗頭さんが言われた、われわれの研究に欠けているものは、例えば今、私は郡と村の間の手永というものをベースにした地域、自治みたいなのになっていますけれども、すっぱり抜けているのが女性の観点です。全く抜けてます。これは史料上出てこない。しかし、私は3年間、郡代の日記をずっと地元新聞に連載をしていて、郡代が赴任してまずやるのが人口調査なんです。それから、各手永が持っている財源、それは手永官銭と申しますが、これは箱に入れてありまして、紙の封がしてある。この封を改めるといふのがあるんです。そのときに、その人口調査、要するに集人別改というものをやろうというときに、女性が出てこないんです。女性が集まらないというのを嘆いているんです。

ところが、江戸時代の人口というものは、そういう人別改というものがベースになって、40何万という熊本藩の人口が出てきているんです。郡代が声を掛けても集まらないのに、どうやって男女総人口が出ているのかというところに、私はやはり、男の場合は古武士として出歩くんですけれども、女性の動き方、行動パターンが違うのではないかと思います。ちょうど幕末の中村恕齋の時にコレラ騒動というのがあるんですけど、そのコレラ騒動の時に必死に悪魔払いというのか、コレラ払いのために、にわか踊りを必死で踊るのは女性です。男性は踊らないんです。だから、そういう意味で、何か私は一つの面として歴史の上でも、私の家の中でやっている、この役割分担を、もう少し社会に広げて生活者の視点で見えていかないといけないし、もう一つは子どもの視点、こちら辺は大事にしていかななくてはならないと思います。

やはり、女性のそういう、わが子を守るというような本能的な部分でどう動くんだろうという視点を、もう少し江戸の地域社会の分析に意図的に生かしていかななくてはならないのではないかと最近思っています。そういう形で、多様な人が住んでいる江戸社会、特に地域社会、大きなマジョリティの中で消されているというのか、男性マジョリティの中で消されている意見を、もう少し汲み上げたいと考えているところであります。

そういう意味での江戸社会の一つのありようというものは、もう少し違ったものがある感じがしますので、教科書で言われている封建イメージではない、もう少し人間同士の社会関係というのがあると思うので、そういうものを検出していきたいという感じがします。

【五百旗頭委員】

やっぱり資源の制約がある中で、地域がどういうふうにもうまくやっていくかというのは、いつの時代も難しく大事な問題なんだろうなというふうに思います。今日、私が、ここに本当に伺ってよかったなというのは、それが単にそれぞれの地域

の問題として放っておいていいのではなくて、全国的な政治とか歴史の大きなうねりと、やっぱりつながっているという実感を持てたということです。熊本国権党というのは、たぶん、そういう地域的ないろんな利害とか、割拠性とかを、何かうまく組み合わせたり、あるいは相殺させたりしながら、熊本で大きな力を築いたんだろうと思います。それが、それに対抗して九州全体の自由民権運動の代表団結を促して、それが二大政党の代表団結のモーメントを時々つくるといような、一つ目のドラマとして私が申し上げたことだったわけです。

また、国権党の中から、なぜか、より進歩的な改進黨の組織を引き締める役割を持つ人間が輩出される。改進黨系がそれによって、なんとか生き延びて時々勝つ。それが二つ目のドラマになったわけです。ナショナリスティックだけど進保的という、そういう存在性格の政党ができたというのが二つ目のドラマとしてあって、それがやっぱり熊本の地域的なキャラクターが大変重要な意味をもっているのではないかと思います。何か熊本発の近代日本史のようなことを、少し、まだ手探りの部分もありますが、考えることができたのではないかなと思ひまして、そういう機会をいただいて大変感謝しています。

【蒲島議長】

ありがとうございました。一つは先ほど吉村さんがおっしゃったところで、横井小楠は正当な評価を受けていないんじゃないかという話ですけども、それは熊本での話であって、たぶん全国的には、とても高い評価だと思います。私がとても尊敬する法学部の先生で、渡辺浩さんという人がいらっしやいますけど、この人が、「一番尊敬する人は誰ですか」というふうに聞いたところ、「横井小楠です」とおっしゃったから、少なくとも法学部の中では高いんじゃないかなと思っています。そういう意味で、再評価がこれから出てくるんじゃないかと私は思っています。

今日は吉村先生と五百旗頭先生に来ていただいて、激動の中に生きた先人達から、我々は何を学ぶかという観点からお話をいただきましたけれども、今日たくさんの方々に来ていただいていますので、ぜひ質問をここで受けたいと思います。

【質問者】

今日は本当にありがとうございます。一県民の立場で過去・現在・未来を含めて私の考えを申し上げます。夢づくり、希望、絆、幸せ実感、くまもと未来会議、火の国熊本県民の皆様、毎日ご苦労さまでございます。明日の熊本、未来づくりに県民総力戦で蒲島県政の経営に参画して参りましょう。英知をしぼり、勤勉、和を以て元気で明るい熊本を構築しましょう。繁栄は日々の誠実な努力と謙虚なる反省・改善により実現します。心をつにして、九州の核・熊本づくりを進めましょう。

そのためには、県民一人ひとりの貴重な忌憚のない声こそ夢実現の架け橋だと存じます。各地域・産業界の声を未来会議へ結集させましょう。熊本県・熊本県民皆々様の行く手が、松の緑のように生き生きとして幸多かれと祈念いたします。そこで県知事にお尋ねいたします。県知事になって言われた言葉で4つ、「1 熊本県を稼げる県にすること」「2 長寿を楽しむ社会を構築すること」「3 品格ある熊本をつくること」「4 夢のある教育の実現を図ること」。点数にしたら何点になるでしょうか。

【蒲島議長】

先ほどの言葉は私の1期目のマニフェストです。それについて、私は自分自身では相当進んでいるんじゃないかと思っています。2期目のマニフェストの中にも活かされていますけど、一つは「活力」、二つ目は外交「アジア」、三つ目は「安心」、四つ目は「百年の礎」。そういう意味で、二期目が折り返し地点でありますけど、加速化、見える化、そして核心を突くような政策を行っています。百年の礎は今すぐできるわけではありません。長くはかかりますけど、きっかけだけは作っておきたい。そのきっかけは十分できたのではないかと思います。

過去に生きた先人達が何を見て、それから、我々がどういうふうな未来を築くのかという、そういうテーマで今日は議論をさせていただきましたけど、安達謙蔵とか、それから横井小楠、あるいは細川藩、そういうものから、どのような未来を築くかというのはとても大事なテーマだと思います。今日は、ぜひ皆さんの質問の機会をたくさん取りたいと思います。どうぞ自由に質問していただければ幸いです。

今日は一つ出てこなかったのが、外交の方で宮崎滔天という人がいます。これは孫文を心底支えた人ですけども、今、宮崎滔天の存在が日中関係にもものすごく、少なくとも熊本と中国の関係にはプラスの貢献をしているんじゃないかなと思っています。そういう意味で、国内政治だけではなくて外交にも、とても大きな影響をもたらした先人達もいるということで、これについてはいかがですか。

【質問者】

先ほどからずっとお話をお聞きして、色々な面で感心しながら聞いていました。今、知事のお話の中に出ていました宮崎滔天も私の地元ですので、当然意識はあるんですけども、安達謙蔵先生であるとか清浦元首相であるとか、それから横井小楠さんであるとか、結構、熊本からは個性の豊かな方が出ていらっしゃるんです。ある面では頑固な人、ある面ではもっとす的な人、そういう結構個性の強い方が出ていて、時のキーマンを果たしている。これは、熊本にいた人たちが施した教育のせいなのか、あるいは土壌が生んだ人間性なのか、そういったところはもうどうなんで

しょうか。

当時、熊本がどういう教育をされたのか私は分かりませんが、藩の教育だったり、あるいは県の教育だったり、自治的な寺小屋の教育であったり、そういったものがよその地域と違っていただろうのかな、あるいは、この熊本という生活土壌がそういうふうな思想を生んできたのか、そういったところがどうなのかなという関心を持っていますので、もし、何かあればコメントをお願いします。

【五百旗頭委員】

これは吉村先生がお答えになることだと思いますが、清浦奎吾について一点だけ補足させていただきたいと思います。

おっしゃるとおりで、清浦奎吾はもともと、歴史の中で、すごく評判の悪い人なんです。最初に首相になるチャンスがきて、でもこれは海軍の協力が得られずに組閣できなかつたんです。ウナギのにおいだけかいで、ウナギを食べられなかつたというので、鰻香内閣というふうに呼ばれております。二度目のチャンスの際に本当に組閣しました。とうとう反動内閣が出てきたというので、三つの政党が力を合わせて清浦内閣打倒に動くんです。第二次護憲運動という大きなうねりになっている。それで選挙をやってみたら、その三つの政党のほうが勝ってしまって清浦は退陣。それで三つの政党が連立内閣をつくって、それ以来、政党内閣制の時代が始まりました。そこで男子普通選挙制も導入されるということで、1930年くらいまでで悪役の首相を選べといったら、清浦がかなりの上位にくるんですが、最近の研究ではそうではないという評価も強くなっています。清浦は、自分が首相になった時に、かなり忠実に、自分は短期政権であるということを実感して、選挙管理内閣としての役割をきちんと果たすということ、かなり努力したみたいなんです。今言った、護憲運動のうねりというのは、ちょっとそういう面を過小評価したんじゃないかという批判が歴史研究の中から出てきています。

それから、私個人が読んできた印象では、藩閥系の政治家というのは基本的には評判が悪くて、清浦は山縣有朋に非常に評価されて引き立てられた人なので、評価は低いんですが、藩閥政府の中で、あえて誰が一番議会政治家に向いているかというときに、清浦の得点は意外に高いんです。弁舌が爽やかで、理路が整然としていて、単に藩閥の官僚政治家として仕事をするだけでなく、議会での議論に耐える人だという評価を敵方からも受けていたんです。ですから、それは、やはり熊本で培われた自己表現の一つのタイプなのではないかなと、いうふうな気がしておりますので、今のご質問は、その点も含めて非常に興味深いものだと思います。吉村先生にバトンタッチします。

【吉村委員】

江戸期の教育で非常に興味深いのは、熊本に所帯を持ちまして住民登録しなくてはならないときに、校区というのがあるんです。佐賀とかでは無いんです。坪井校区、碩台校区とかあるんです。あのルーツは何だろうかと思ったときに、おそらく、その出発点は時習館の学生たちが京町連とか坪井連というような集団登校をしていましたので、おそらくそういう名残が近代教育につながっていくのだろうと思っていました。

もう一つ、なぜ地域から色々な偉い人が出るのだろうと思ったときに、教育システムという、みんなは寺小屋というんです。でも、熊本の場合、寺小屋ではないんです。各手永に教育官がいて、地域の優秀な子どもは10歳くらいで会所から呼び出しがあるんです。そして、10歳くらいで数年間読み書き、そろばん、あるいは行政教育、そういうものを受けて、そして15~16歳で一つの会所の見習いになって、20歳前後で庄屋になっていくんです。そして、庄屋でまた数年間やりまして、もう一度役所に呼び戻されて幹部役員になって、もう一回外に出たり、いろいろ役職に就くわけです。ですから、庶民教育ではないんですけれども、地域の、かなり高等教育の受け皿として城下には時習館がありますけども、いわば郷学というのか、手永の会所が地域の少年たちに、ある程度階層は限られていますけど、かなりの教育をやっているということです。そして武芸もさせていますので、そういう人材がおそらく明治の、特に前半期に活躍をする、そういう土壌になっています。

もう一つ私は熊本で驚くのは、高校出身者が大事なんです。熊本高校出身、済々黌、私は佐賀の唐津の出身ですけども高校というものは、ほとんど問題にならないんです。だから、熊本は大学を出るよりも、どこ高校かというのが非常に強調されるのは、おそらく明治に原点があるだろうと思っています。おそらく、国権党うんぬんという問題とも非常にクロスする問題だと思っています。ですから、もう少し江戸社会も、そういう教育という面で見えていくと、非常に近現代とつながるものがあるだろうと思っています。

【質問者】

ありがとうございました。もう一ついいですか。今、お名前が出た人以外にも、いろいろな活躍した人が過去にいらっしゃるんですけども、見てみますと、トップに上りつめる人って、あまり出てきていないんです。みんな、言葉にするとフィクサー的だとかコーディネーターだとか、そんな裏役、あるいは脇役、そんな形で活躍された方は結構いらっしゃるんですけど、本当にトップリーダーに上りつめてスポットライトを浴びた人は、ほとんどいらっしゃらない。清浦先生が一人ぐらいかなと、極端に言えば。たぶん、二番目が蒲島知事なのかもしれませんけども、そん

な感じがしてしまっていて、その原因は何なんだろうと。ここに、ちょっとこれからの熊本の課題があるのかなと、教育の課題も含めて思っているんですけども、いかがでしょうか。

【五百旗頭委員】

それは、さらに核心に近づいてきたような気がいたします。私の知っている範囲のお答えにしかないんですが、明治期以降についていえば、やはり西南戦争のトラウマは非常に大きいと思うんです。あそこで結局、薩摩内部、あるいは薩長間の争いに自分たちが巻き込まれて大きな被害を受けてしまった。あるいは、処罰を受けてしまった。そこからどう立ち直るかというのが非常に大きなテーマになっているんです。そこで、国権党の中で非常に強く出てくる考えは、一種の挙国一致志向なんです。あるいは、挙政府一致志向。今は薩長藩閥政府だ、弊害もあるけども彼らは頑張っているし、当面彼らにやらせるしかない、そうだとすれば、薩長が争うというのは明らかに国益に反する。だから、薩長を、とにかく政府全体を和解させなきゃいかん。そのためには与党として熊本が薩長全体を支える。薩長が一枚岩であれば、われわれは自己犠牲を払っても支えますよ、ということです。そうすると、熊本は体でいえば足になってしまうんだけど、でも一本だけの足で、熊本が無ければ日本という人体は成り立たない。これは熊本国権党の自意識でありプライドになるんです。そうすると、まさにおっしゃるように、フィクサー的な役割を果たす人がどうしても増えていくんです。

特に上りつめた人としては、もっとダイナミックな政治を言論の世界で提唱した徳富蘇峰がいます。彼が平民主義を訴えていた明治20年ころ、本当に彼は輝いていたというふうに思います。彼のもう一つのアイディアは、単に一つの政策とか、一つの政府がずっと続くというのは、決して長い目で見たら良いことではないということです。常にプランBを社会は持っている必要があって、プランBを盛り立てて、その時、主流の政府や考え方が失敗したら、常に取って代わる人たちがいるというのが大事なんだということを徳富は意識して、そういう勢力としての改進黨系を演出していくんです。ただ、その勢力を強くするためには、国権派と手を組ませることが必要で、それが、やっぱり徳富の外交政策論に無理というか、情緒的な要素を招き入れて、人気はあるけども、かつての輝きはだんだん失っていくということがあったんだろうと思います。でも、徳富の時代というのは確かにあったんです。ですから、確かに熊本から出てくる人材はフィクサー的な人が多いというのはそうです。それには歴史的な理由がある。しかし歴史的な理由があるのみであって、現代も未来もそうであるという必要はないと思うんです。新しい条件の下でナンバーワンになる人が出てきても、全然おかしくないというふうに思っています。

【蒲島議長】

吉村先生いかがですか。今の質問。

【吉村委員】

そうですね、これはなかなか言いにくいことなんですけれども、私が一つ感じていることは、私、佐賀県出身で、かつて佐賀県の旧藩主であった鍋島さんが県知事をされていたんです。熊本の場合も細川さん。こういうのは全国的にそうはないんです。かつての藩主系の方が知事になられる、そして細川さんの場合は一国の宰相にまでなられているんです。これはまた非常に稀有な例ではないかと思うんです。これは歴史的に紐解くと、やはり肥後の場合、戦国大名というものを、要するに自前の、例えば菊池を一国の戦国大名に担ぎ上げるといような、そういう形を取れなかったという、ある意味、歴史的なトラウマがあるのかもしれない。

ただ、五百旗頭さんが言われるように、これからはそういう意味で非常に地域の、ある種、割拠性を持ちながらの自治、まとまりというのがあるので、かつて惣庄屋が千葉城に集まって大きな年間スケジュールを決めたような、そういう現代版再結集というのが今からあってもいいのではないかと。また、決して、そういうかつての殿様が知事になられる、一国の宰相になられるということも、それほど歴史的に皮肉的に見なくてもいいのではないかという気もしています。だから、そういう形でも、熊本県出身者を出したという面での意識は、私は持ってもいいのではないかと思います。

今、そういう面ではフィクサーという形で言われたけれども、そういう細川さんのようなケースもあるということも、熊本の一つの歴史の形として正当に見てもいいのではないかと思っていて、違う形の歴史を、もう一回作っていけばいいのではないかと考えています。

【蒲島議長】

他に何か、もう一人だけ、質問ありますか。

【質問者】

今、江戸時代の話がずっと出ていましたけども、政治と経済、民主主義と市場、国家と資本主義というような形の中で、現在では常に後半の部分、政治と経済であれば、常に経済政策、あるいは民主主義と市場でいえば TPP の問題、あるいは国家と資本主義であれば経済の経営者と国家の関係ということで、やはりどうしても経済の部分とか市場の部分が優先されていると思います。その中で、消費者という考

えが非常に大事になってきて、色々な政策や、経済が動いているような感じがしています。一番大事な部分は、やはり先ほど女性の話もあったんですけども、労働者や生産者の部分にもっと光を当てていく必要があると思います。先ほど吉村先生が言われたように、税を上げると非常に民衆が反発したというお話もあるんですけど、江戸時代の場合では働く人と、消費する人の立場で政治が行われていたのかどうかということと、熊本の未来に向けて、もっと働く人といいますか、生産をしていく人たちにとって、どういうものが大事になっていくのかというところを、ぜひお聞きしたいと思います。

【吉村委員】

私の今からの研究でこれは非常に重要な点で、この前、東大に行って話をしたと絡むと思うんですけど、熊本藩が幕末寸前、おそらく国の国民生産といいますか、総生産は250万石くらいあります。たかだか、熊本藩の財政は35万石なんです。そうすると200万石くらいは民間にあるわけです。じゃあ、35万石と200万石というのは分離されているかということ、そうではありません。そして、地域の財政というか地域の自治が始まる時の18世紀の後半に、地域がある程度お金を持つきっかけになるのは、税金の部分をカットしているんです。税金の部分を地方に委譲しているんです。そこから雪だるま式に増えておりまして、おそらく19世紀の江戸社会の経済というのは35万石で回っている本会計的な部分とは別に、いわば県庁と地方政府が、ある資本循環で取り結ばれた、ある種の中央地方連携型の非常に大きな財政サイクルになっていると思います。藩財政とかでは見えないような、ある種、国民経済的な、そういう段階になりつつあると私は考えています。そうじゃないと、あれだけの巨大なインフラ、あるいは山の頂上まで上る水田というものは開発できません。あれは税金補足の面だけで見ていると、とても民間はやっていけません。歴史学もそこまでは今は追いついていません。まだ固有の藩財政という捉え方をしているけども、熊本藩の場合は250万石というスパンで熊本藩の経済を見ていかないと、細川さんの35万石という財政スパンでは図れないような形になったと思うんです。

そうすると、やはり、今、税の問題を言われたけども、そういう意味では、今までは年貢中心の税だったものが、色々な形で税も取られているかもしれませんが、それがまた還元されているというような、非常に私は19世紀は近代の経済に入っているというような感じを持っているんです。ですから、今からは、私もそういう250万石という経済のサイクルで熊本藩の経済、これを近代とどうつなげていくかという、そういう観点で少し提示してみたいと思っています。通潤橋ができ、霊台橋ができる、それから山の頂上まで水田が開かれる、そういうものを古色たる江戸

の年貢経済だけで見ていると、歴史は捉えられないと思うんです。

【五百旗頭委員】

今、質問された方のイメージを私も共有していて、資本主義的な市場経済の決定力が強くなって、あたかも石臼のように、それ以外の全てをすり潰していくようなイメージを、時として持つんです。それに対する、これといった処方箋はないんですけども、吉村先生が今日お話になった、この近くで開かれた全体会議であるとか、そして私がお話した集落への積み立てとか話し合いというのは、経済でも政治でもない何かです。たぶんモラルエコノミーというようなものの領域である。つまり、それぞれの個別の利益は尊重されて、多様な意見は尊重されています。損益の計算はしっかりします。でも、最終的な目標は自己利益ではないです。何か公共的な利益であるという営みです。

その前にご質問いただいた方に十分お答えできていなくて、これを言いたかったんだというふうに今、思い始めているんですが、その中で出てくるリーダーシップこそ、民主主義の下での本当のリーダーシップなんだろうと思います。個々人が自分の利益を思う存分、開陳して、そこで競い合った結果、選ばれたリーダーが本当のリーダーだろうと思います。願わくば、彼らが地域や国家のリーダーになっていきまして、さっき言った石臼に対して、もう少し慈悲深い動きをするようにしてほしいと思います。そうやって選ばれたリーダーの足を、引っ張らないということです。日本社会の一番の病理は嫉妬だだと思いますので。いろんな意見を言う、しかしそこで勝った人に対しては、やらせてみる、ということが大事だと思います。

【蒲島議長】

ありがとうございました。長い時間ご意見を賜り、県政の発展を考える上でとても役に立ちました。これを積極的に生かしたいと思っています。私は東大とハーバードと、それから北京大学で「行政のニューフロンティア：くまモンの政治経済学」という話をしてきました。熊本の4年間で私が1期目で借金を返したのが1千億円と言いましたけども、なんと、くまモンは熊本県に2年間で1,244億円の経済効果をもたらしました。これは熊本の持つ財政規模から見ると、もう一つのマーケットを形成しているような気がするんです。今、そのくまモンの活動空間をどんどん広げていっているところです。

そういう意味では新しい経済空間が、熊本県には、くまモンを中心に世界中に広がりがつつあるなと思っています。一番の例が、台湾で5,000軒のセブンイレブンが、くまモンフェアを中心にして熊本の品物を買ってくださっています。香港でもそうですし、中国でもそうなると思いますけども、それはさっきの細川藩の税収から

見ると、もっと経済的な効果があったのではないかと同じで、熊本県の持つ財政規模から見ると、くまモンの可能性はとても大きいなと思います。道を造るのもいいし、橋を造るのもいいけど、あんまりくまモンはお金を使わないんです。だから、そういうのが、私が見た行政のニューフロンティアじゃないかなと思っています。今まで地方政治には、あまりなかったケースだと思っています。

そういうことで、今日は本当にありがとうございました。